

ふかやの光

佛光の巻

後編

如来光明歎徳章	前編	一
さんげ		六
祈		六
親縁		七
無量光	後編	一三
無邊光		一六
無碍光		一九
無對光		三〇
炎王光		三五

如来光明歎徳章

あみだほとけのみるつとみひかりとは、いと尊くひとりすぐれたまひて、あらゆるみほとけのひかりの、よく及ぶべきにあらず。さればこのみほとけをば、かぎりなきみひかり、ほとりなきみひかり、さへられぬみ光、ならびなきみ光り、たけきほのほのみひかり、きよらけきみひかり、よろこばしきみひかり、さときみひかり、たえぬみひかり、思ひがてのみひかり、稱へがたきみひかり、日月に超えたるみひかり、のたふときものと、あがめたてまつる。

夫人ありて、このみひかりにあひ奉つらば、心の三の垢さへ

一

きえて、身も、こゝろばせも、やはらげく、よろこびとやすきとに、みだされて、いとすぐれてよきこゝろおこるらめ。

もし三のくるしき處にても、此のみひかりを拜し奉らば、かれらも、みなやすらふことをえて、またなやむことなく、いのち終りぬれば、みなすくひをかむらん。

かのみほとけのみひかりは、あきらけくしてあらゆる處にきこえぬこともなかりけり、しかればひとり我れいまそのみひかりを稱へたてまつるのみならず、あらゆるもろくの、みほとけも、聞縁も、もろくのほさつたちも、ことごとくともにほめたへざるものなかりけり。

もし人ありて、そのみひかりと、みるつと、みちからとを、聞たてまつりて、日々に夜々にまごゝろをさゝげて、みすくひをいのりたてまつり、こゝろにかけて、たえざれば、そのこゝろのねがふごとくに、そのみくに、生るゝことをえて、もろくのほさつおよびさと人たちのために、ともにほめたゝえられて、そのいさをしをたゝへられん。そのしかるのちみほとけのみちをさとり得るときには、あまねくもろくの、みほとけおよびほさつがたに、そのみひかりをほめたゝへられんこと、またいまのみほとけの如くならんと。

佛の曰く、われあみだほとけの、みひかりとみるつ、いと

三

たかく、ことにすぐれます。ことをとくとせば、この世をつくしても、なほいまだつくすこと能はざるべし。

四

夜を口について、あなたをほむる。たのしきみひかりを興へたまへ。

まごゝろをさゝげて、すくひをいのる。かぎりなきいのちをあたへたまへ。

みひかりをあふぎ、みむねにしたがふ。やさしきこゝろをあたへたまへ。

みひかりによりてこゝろのあかきえてやすらけきこゝろをあたへたまふ。

聖き御名にむねのくもはれて、さやかに月はてらしたまふ。

五

さんげ

われらがつくりしつみは、しげきつゆのごと、あなたはあさのみひかりにて、いつしかきえうせん。

祈

このいのちをあなたにまかす。あわれみてわれをすくひたまへ。身と口とこゝろにつくりしつみとがは、いまくいあらためん。あなたはこれをあかしたまへ。

六

親縁

宗教的関係の親縁とは如來が衆生の感情の信念に對する親愛なり。而してこの親愛の最も親密にして最も親和力の強きものは生物の異性相愛に比例すべきものとすれば、神が衆生に對する親愛の強きこと其最と微妙に最と美麗に最と殊勝に表現し給へる相好に於ても察し奉ることを得べし。いかにとなれば如來は本法身智慧の身に在して既に見聞に超絶し相好も形色にも超えたるなれども、然れども神の一大靈力の大きな慈愛より其の大なる慈愛を表現さんが爲に、實に無比の妙色身最と美麗尊嚴なる相好と現れ親愛をもて衆生に愛慕を要求し給へる如くに感じ奉るなり。神は如何ぞ斯く殊勝なる相好をもて衆生の信念を誘引し給ふぞ。是併ながら衆生をして神の愛慕の信念を惹起さしめんが爲の方便に在さずや。神聖なる清淨なる神性を不淨なる醜劣なる生物に比例するは實に其罪恐るべきも、暫く生物進化の理に例して美の理由を言はし

七

めよ。生物は原始劣等なる状態より漸次に進化し發達して現在の人類の如きに到りしは一には生物が自然に淘汰せられたる結果なりと亦一方には雌雄淘汰の結果なりと。中に就いて雌雄淘汰の理に基づきて生物は美に進みしとの説は即ち生物の雌性なるものが雌性の愛を購はんが爲に専ら美的方面が發達せしものなりと。或は色の美または聲の美例へば孔雀の尾鷲の聲の如くに數千萬年に歩々に發達したる結果今日の美を呈するに至れりと。すべて生物の美は異性の愛の表現なりと言ふも誣ざるべし。殊に人類に至つて身體姿勢より或は言語に詩頌に名譽にまでも自己の美を現はして異性の親愛を求む。獨り生物の姿勢に美が發達せしのみならず、すべて人類が身を裝飾衣服寶冠環玩の類よりまた詩歌文章等に至るまで美に進みたる動機雌雄淘汰の理に基づきたると言はざるべからず。肉と靈とは本來染淨性を異にして天壤の懸隔あるも神人の關係に於てそれと相類似せる例を見ることを得べし。

されば大なる愛の權化たる神の相好を表するに最勝最美一切に超絶したる姿色と最も勝れたる相好とを以て其身を莊嚴せることは最も強度の靈愛を衆生に惹起させんが爲めなり。聖典にアミダ佛は閻浮檀金色の如くまた八萬四千の相好より無量の光明をもて遍く十方世界を照し念佛の衆生を攝取して捨て給はずと。また聖典に如來妙色身は世間に與に等しきもの無し。無比不思議なり。是故に我今歸依し奉る等。大愛の權化たる如來の勝應身は八萬の相好無盡の光明は悉く滿身の愛より發現し給へるに外ならず。如來は本智慧の相にして世俗の相を超絶したると云ふも、凝固なる無爲寂滅の死物にはあらず。常恒不斷に靈活活動せる一大靈力なれば、大愛の力より滿天滿地の愛をもて衆生に待向し給へり。いかにも殊勝なる相好は全く是大愛の化現なり。されば聖典に佛身を見る者は亦佛心を見る。佛心とは大慈悲是なりと。如來の妙色莊嚴の相好は大慈愛の權化たることは既に然り。然らば衆生はいかなる心念を以て如來の親愛の聖意に相應すべきや。是衆生の心情の如來に對する宗教的靈愛聖戀こそ如來の親愛に相應す。

宗教的衝動として高きみ空に神に憧憬れ靈に戀念するは感情的信念の精髓なり。斯愛斯戀もて、神人交感の動機たり。彼のプラトーンが理想の愛を述べて、美は天上の容姿に伴ひて輝きつゝある者、彼若し地上の眼前に現はれ來ると雖も是最も純潔なる感覺の際より其清き光を發するもの、若し人世に生れて素懐にして且つ前世に於て常に榮光を觀得したりし人は其神の清貌を見て神聖端嚴なる相好に驚愕せざるはなし。先づ一瞥の下に悚然として身戰き亦宿世畏敬の餘情は自から沛然として湧き來り恰も神像に對する如く身を投じて之が犠牲たることを辭せざるべしとは、蓋しプラトーンが理想の愛の消息を洩らしたるなり。

宗教的天才が神の戀念は常住不斷に理想の美天國に逍遙し晃曜赫々たる光明は胸臆に往來し其麗しさ其覆はしさ何物かは世に比例すべきぞ。吾人は宗教界の偉人らの其胸裡に燃へつゝある靈戀の熱いか程に高く神の感情のいかに深かりしかは到底測り知るべきに非るも、今暫く教祖世尊が諸根悅豫し姿色清淨なるは常に如來の靈相に感應しつゝある反映なりと信す。又聖龍樹尊者が如來の靈應身を讚して「面善圓淨如滿月。兩眼淨若青蓮華。聲如天鼓俱翅羅。故我頂禮彌陀尊。」と是聖者が理想の面影を模し出したる讚美歌ならずや。聖源信が「ぬれば夢さむればうつゝ、東の間も忘れ難きは彌陀の面影。」とは信聖者が胸宮に存在せる靈相しるべし。靈的憧憬の水澄む處に愛の化佛の月は永へに影をやどす。斯る愛念の深き宮に耀々として化佛は光を放ちけり。實に斯不可思議なる光こそ聖者をして信如來として支那に於てまで崇敬せられたる所以なり。聖源空は「アミダ佛と心を西に空蟬のぬけ果てたる聲ぞすべし」と、空尊者を時の人稱して曰く、形を見れば法然房、實を云はばアミダ如來とまで衆人の爲に歸依渴仰せられしこと、豈に夫れ虚ならんや。空尊者の聖たる所以は内靈應に充ち給へばなり。

吾人は會て一休和尚の譚を讀みて自から會て經驗せし靈的戀愛てふことを古今同軌なることを感じたりき。世に一休宗純和尚の如き資性磊落落々たる者稀なるならん。

師は世の名利に向無貪著たるに拘らず宗教的感情に富ることを知らるべし。師壯年にして専ら坐禪工夫して深く神膽を砕く時に鬚髮長くのび顔色憔悴たるが、時に檀越等深く之を愁ひて醫師をして診察せしむるに診察上に異常なしと。こゝに於て在俗の輩謂らく和尚年青壯なれば若や世の青年者を懊惱する處の戀なる神の業にもやあらずやと。竊かに以て和尚に問ふ。和尚滿面に悦豫を表はし即ち紙筆をとりて其の實を述ぶ。本來の面目坊が立ちすがた一日見るより戀とこそなれ「我のみか釋迦も達磨も阿羅漢も此君ゆゑに身をやつしけり」世の人々が戀てふ文字は唯肉にのみ拘はれると謂へり。未だし。神に對する靈戀なるものあり、是なん人の心靈に宿れる愛の神の音信を傳ふべき天使なることを知らずや。

無量光

法身。一體の元理より無限有限の二界となり、有限に色心の二法あり。

一心生滅不生滅の二門となり、不生滅は如來本體にして不生滅にして又無限。一方には生滅の心象と現じて又有限の個體となる。此生滅の心理作用に依て十界の依正と現じ來る。此十界の依正は法身を根底とし個々の心によつて十界無量の差別と變現す。

無限の一法身より心象には個々無量の差別の境界となる。此無量差別の境界は本是一心、心變現の個體は無量なりと雖ども十法界を出でず。十界とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上聲聞緣覺菩薩佛界なり。十界共に國土と身體と心機と各其分に應じてあり。地獄界に亦無量の果報差別の分段あり。八地獄九種鬼三十四億の畜類四修羅五州人三界天の如く六凡の衆生の分段生死の中無量の差別と變じ、國土に無量の種類あり。植物の無量、身體無量の差別、心性無量。聲聞の四果緣覺の菩薩に無量の階級あり。無

量の願に依て變現無限。佛に無量の應身あり。斯の如十法界の國土と身體と心機との無量差別の形式は悉く一法界の根底より産出せざるなし。

彌陀法身の智慧光は普く自己の法身より産出せられたる處の無量差別の體を照しわけたまふ。

六凡の衆生は此無量光の中に在て之を識らず。故に自ら法身の根底より流出せし自己が彌陀法身の一分にして之を根底とせる所以を自ら識らず覺らざるが故に迷没す。

此光明は法身の光なれば此光りによれば自己の個々無量の根底は悉く彌陀の法身なることを覺らすべし。

聲聞緣覺等の四聖は此光によりて自己本法身たることを覺る。中に於て聲聞と緣覺とは法身には真空の理にして之に無量の聖德具備せることを覺らす、單に真空の理を證して自ら足れりとす。菩薩は自己本彌陀の法身たることを偏眞に悟るのみならず、これに無量の聖德と靈福とを豐備すべき性能あることを覺るが故に、此無量光によりて法身無量の德を顯はさんと願望す。

佛界は法身無量の德悉く顯現して缺くることなし。

此無量光は法身の德なれば法身の根底より流出して無量差別の十界三世間を盡十方法界に無量差別の體質を顯現す。普く照して智慧の光なることを記すべし。

此光は佛の方面よりは法身の光明なれば其本質は絶待理性の態なり。衆生の心の根底に照耀すれども衆生之に垂きて覺了すること能はず。衆生の根底にありて從本以來常に照耀せり。

衆生の方よりは自己の根底に入つて、佛性開發するとき始めて自己本如來法身たることを覺る。自己の佛性を見せしむる光なり。故に此光を蒙るときは彌陀は統一の法身にして自己は個體ながらに是法身たることを覺るべし。是此光の功德なり。

無量の衆生及び國土心理の根底に有て當然として照すはこの光なり。

無邊光

一六

般若の徳。

是前の法身の屬性にして三大の中の相大なり。是太陽の光明の如し。是光明は大智慧遍照法界眞實識知等の如來に屬する無邊恒沙の智徳圓滿して遍く法界に滿する光明なり。其質は理性光大智慧態なり。功能は（衆生）の屬性なる無量の性功徳所謂大智慧四智十力十八不共等の徳を顯はし出す光也。いか成る境を照すやとならば、（光之を照したまふ目的はこゝにあり。）

謂く心性差別の十法界無量の個體には何れも其屬性あり。其屬性とは十如の如是相、如是性、如是體、如是力、如是等の十如は是屬性といふべきものなれども、此中に於て、

相とは外覽によりて別つべきを云ひ性とは内に改ふべからざる性分あり、主質を體と爲し、功能を力と爲し、構造を作と云。

衆生は無明によりて總相の眞理より迷出して個々の體となりてより隨て屬性もまた十界其相性を異にす。

衆生は此般若の徳を誤用して煩惱をなす。是によつて心理の屬性諸の煩惱をなす。衆生心性に無邊の屬性本來具有して之が顯現するときは徧照法界の光明無邊恒沙の功徳を具する太陽の光耀赫耀として四方に輝くが如くなる屬性有ることを知らず。此無邊光に遇ふときは自己の心性に無邊の性徳顯現すべし。六凡の衆生は是を識らず。故に自ら卑劣なる身心の相貌と六道其相を殊にし、地獄焦（焦）苦惱の相貌、

人には又無邊の相貌の殊なる心性の異容あり。細かに論ずる時は無邊の衆生に無邊の相貌と性分とあり。其外貌の個々に殊特の相あり。人に殊特の性分あり。法界無邊の衆生と心象と國土の相貌と性質とを別たば實に無邊の相あらん。皆是衆生の迷より顯現するところの心象なり。

一七

一八

佛能く諦に其相貌と性質とを個々過つことなく照して知たまふ故に無邊光と名づく。六凡の衆生は之を識らず。自ら迷て無明態となり、心性無邊の性本來具有することとを識らず。之を開く時は大智慧光明徧照法界常樂我淨等の無邊の功徳性あるを知らず、二乗は單に眞空に屬せる三明六通等の屬性あることを覺れども未だ無邊恒沙の屬性あることを識らず。

菩薩は報身に無量の功徳あり三身四智乃至無邊の性徳を知る。

佛果は已に恒沙無邊の屬性所謂三身四智十力十八不共法三十二相八十隨形好等已に顯現す。

彌陀の法身無邊の故に其屬性も無邊なり。之に迷へる處の迷界も亦無邊なり。本體無邊なれば現象界も無邊はり。本體の屬性無邊なれば現象界の屬性も無邊なり。廣く空間を盡して無邊なれば現界もまた無邊際。個々の心象無邊國土も身體の屬性も亦無邊なり。是れ悉く彌陀無邊光の攝（護）するところ。

無碍光

解脱の徳。用大。

種々不可思議の用あつて法身智相第一義なれども衆生の爲に報應の身を現じて化を施すとは此の光りなり。法身と般若の徧く一切處に周徧せる如くこの解脱の光りも又一切の處に周徧して妙用を施さるる所なし。故に盡十方無碍光と名づく。用大には解脱と靈化の妙用あり。

衆生本法身より迷ひ出で、種々の業に依て種々の形を受け、此川大を誤用して種々の十界無量の相を盡く。

十如の中如是力と如是作如是因と縁とは用に屬す。

法身に無量の性徳ありて心理作用によつて即ち業に依て種々の五陰を盡く。十界悉く心變の作用にあらざるなし。

一九

無 碍 光

二〇

解脱の徳。

此光りにあふものを苦毒と罪惡を解脱せしむ故。

是用大なり。用大とは起信に自然に不思議の業種々の用あり。即ち真如と等しく徧なく一切處に徧し又用相の得べき有となし、如來は唯法身智相の身第一義諦世諦有ることなし。但し衆生の見聞に益を得るに隨て説て用と爲と。此無碍の光明は其體は理性の智慧光明にして盡十方徧虚空界に徧滿し其質清淨なる大圓鏡の如く不可思議の妙用ありて衆生の見聞の機に隨て或は無量の相好莊嚴の妙色身寶莊嚴の清淨國土に現じて大菩薩の爲に教化し。或は丈六弊垢の身を示して之に應せる處の二乗及人天を化度し。或は個人の一心に佛を見んと欲して自ら身命を惜まず戀慕渴仰する者の爲には其れに應せる妙色身を現じたまふこと、明鏡を執りて自ら面像を觀るが如し。

方便法身より法藏菩薩を化現して無量の大願を發し超世の化用を顯じたまふも此光明の徳より現じたるに外ならず。此法智相の妙用無碍の光は法界に周徧せるが故に、一切の處に於て衆生の信仰と作業の處に於て化用を施さざる所なし。念々衆生の心の惡素質を脱却し神靈同化して三垢消滅し身意柔軟にして善心生ずと。此光明の功德なり。

盡十方微塵の刹土に於て無盡の化用不可思議の業を以て精神的光明として活動す。十方諸佛菩薩の化用は悉く此無碍光より示現して活動するに外ならず。

此理を意識して活動せるものと、未だ意識せずして任運に活動せるものとあり。一切衆生の種々善業は皆此妙用を不識的に活動せるに外ならず。不識的に物は其作業に於ては自然に此妙用に適したりしも意志まだ轉化したるに非ざるが故に解脱すること能はず。

六凡は此光に垂きて妄業罪惡業を以て自ら流轉す。

二一

妄心、心理作用が其原因と資縁との關係と種々の作業のいかゞに依て三善三惡の六道の身を惡衝動を因とし之が動機となるべき惡世界の縁として。

内心邪見にして外惡逆をなすは地獄の因業、慳貪にして肉慾我慾にして中の惡は餓鬼道、肉慾にして下の惡は畜生道傲憍勝他の念僞善なるは修羅道、倫常を正うして中の善なるは人道の因、清淨高潔にして靜慮を好みて上の善業は天上の因業。

斯の六道は不可思議の妙用を誤用して身口意三業に妄惡の業を起して妄想の中に苦樂の果を受け、因果關聯して轉輪止むことなし。此光明の妙用を未だ原因を意識せずして自然に幸合せるものに三乘あり。此理を諦かに意識して菩薩あり。

二乗は此光に神聖同化の妙用あるをしらず。惡質を解脱する一面のみをしりて無漏正道に行道す。

菩薩は此光によつて六波羅密等を以て上求菩提下化衆生の道業を修す。

佛は圓滿に解脱靈化して缺くる所あるなし。

此光は普く十方無限の世界に周徧して、不可思議の妙用を與へざる處なし。衆生の心中に恩寵の光となりて是を感ずるものはすべての惡素質なる煩惱の感情も罪惡の衝動も漸々に消滅して惡質を脱却して神靈態に同化したまふ處の妙用あり。之を無碍と云ふ。

此光りは十方世界に於て衆生の精神を靈化して生活活動せしむる光、たとへば太陽の萬物を化育するが如し。

佛の方は無量光は法體にして周徧せる理性光、日の體の如し。無邊光は其屬性にして智慧の相慈悲の相、日の光明の如し。無碍光は用大にして一切處に活動す。日光の萬物を化育するが如し。

初の光りは衆生の自己の佛性を知見せしめ、次の光りは佛性に無邊の性徳具備せることを發現せしむ。第三の光りは之を覺り得るのみならず惡質を脱却して神靈同化して活動せしむる用あり。

二二

光明の體は即ち本體にして性質は絶對的理性大智慧光明の神靈態なり。

心靈態にして衆生に直接には精神に接すべきものにして身體には間接に接すべし。

此光明に接せんと欲せば先づ自己一心の根底もと如來法身にして絶對的大精神なることを観すべし。此の心の本體は大海の湛然たる如く我執分別は波浪の起りし如く、

この波もとは大海水の如し。自己の根底は絶待なる彌陀の法身たることを覺悟すべし、自分の如く十方微塵の刹土も衆生も萬物悉く彌陀法身の同一根底なる別々の波浪たることを認識すべし。然れば自己の根底法界一體、法界一體より森羅萬象之より出で、無量の差別の體質となる。

無量の三義。法身は無相なれば無の量即ち眞諦。應身は無量の身を量現す、即ち俗諦。報身は無量即量なれば中道諦。

然らば是彌陀の法身を以て根底とする個體の衆生なれば之を見聞の刺激によつて之を識認し感得すべき性能具足するものと信す。此性能を賦與せられたるにも拘らず之を捨措くことは罪なり。

無量光。

無量差別の法界を照す一切智なり。法身の本體より無量差別の現象界に無量の差別の別性個々の分界を現はす。法身智相の光普く一切無量の差別の品類を照して遺すことなき故に無量光と名づく。是れ同一の法身より出たる別體個々の別體を知りたまふ智光なり。

法身の根底。同一の理體は無明によりて垂きて個々の心性と現じ無量の差別の體となる。今十界十如一心三千の理を以て無量を顯さん。十界とは六凡四聖なり。地獄餓鬼畜生修羅人間天上之を六道と名づく。聲聞緣覺菩薩佛界を四聖と云ふ。合せて十界と名づく。此十法界が身體と心機と國土との三機に於て各々特殊の點を有せり。之を十如と云。謂く相貌、性質、體量、能力、作業と素因と資緣と智果と報果是なり。

此十界の心理には他の九界に變化すべき性能と形式を豫備せり。十界各々十界を具

すれば百界と成る。百界各十如の形式備はれば即ち千如なり。之を國土と身體と心機との三世間に配せば三千の形式あり。是の如く三千の妙理は森々たる動物に至るまで其性能を豫備しながら無量の差別の個々の體となりて分類無量となる。

心理作用が外界の誘導刺激に依て三善三惡の六道の現象界となり、また光明的薰發の刺激に依て四聖と成る。

報身智慧光は此三千の法界乃至無量法界萬類を照して遺すことなき之を無量光と云ふ。此光明の中に在て之に垂き、自ら識らず、無明の中に生活するものは六凡之なり。無明の中に眞理に順するものは三善道にして眞理に反するものは三惡道と云。

此光の中に惡素質解脱して未だ積極に靈化せざるものは二乘是なり。此光に消極の惡素質解脱するに止らず聖徳と靈福との積極的方面的靈化し萬類をして同じく靈化せんとして進みつゝあるものは菩薩是なり。終局目的に一切の萬類と共に解脱靈化の圓滿に完全に到達せるものを佛と名づく。

此光の中に在て識らざるものは六凡なり。解脱の一面に偏せるは二乘なり。菩薩と佛とは圓滿なる因地と果位となり。此光明の中に解脱靈化の進化の階級を菩薩の五位五十一地の階級を設られたり。

菩薩の眞如を證すとは此光明を被りたる謂なり。

斯の如く無量の差別界を照して知りたまはざる處なく見ざる處なきを無量光と名づく。

無邊光。是般若の徳、法界差別界の性と相とを照す智。先の無量光は差別の主質分界を照す法身の徳の故に。本體は遍空間にして無邊の故に現象界も無邊なり。國土及び衆生も無邊なり。衆生無邊の故に衆生の心品も無邊なり。所謂る十界十如三千の妙理、上は三千の形式個々無量の形式を知りたまふ智にして、是は内容を照したまふ智なり。地獄より天上に至るまでの六凡と四聖との十如是より、乃至三千の形式に於て無量の品類あり。無量の法界は普く法界に周徧して邊際あることなし。無邊の法界に

充滿せる衆生の内容。斯の如くの十界三千の理是もと一實の本體無形の真空より、有形の假態なる現象となり、現界無邊の差別の假諦と本體とは佛智の光より照見するときは、上の無量光は法身の徳なれば法身より個々の差別の法界萬類と顯現したる分界形式を照しわけて知りたまふ。無邊光は般若の徳にして三千の形式無量差別の内容を照したまふ。

三千の光明普く法身の光明より見れば三千無量の差別の境界は悉く空なり、(一)量光は三千無量の境界歴然たり。無量光よりは無量即量、中觀に無量の光は中觀にして無量の法界をして即(法)、彌陀即衆生。

無量光。法身の體相用、無量は本體より派れ出で、無量の差別の別體となる。之を照し見る智慧の光り。無量差別の別體は其本同一如の本體を根底とせざるものなし。

無邊光は般若の徳。法身の屬性にして主質に非ずして主質に屬する性と相となり。

無礙光は解脱の徳、是應用無礙の義にして此光りの妙用無礙なるを明す。法身は譬へば太陽にして般若は光の如く解脱は之萬物を長養するの用あるが如し。

無量光は普く一切無量の主質個々の形式の差別の無量を照す智慧にして、無邊光は屬性を照す智慧にしていかなる境界がこの光を(一)る。本體より派出したる三千の個體には主質には各々其屬性として其性質と相貌と具せざるはなし。三千及び無量の形式あるが如く其内容もまた無邊なり。

佛の方よりは法身は無限の故に屬性なる神聖恩寵、即ち智慧と慈悲ともまた無邊なり。所攝の境三千の性相を普く知たまふのみならず。(以下斷絶)

無 對 光

靈化の徳。絶對の徳にして三身即一、三法即一、遍に一切の境界に超絶す。三身を統一し、三徳を含藏し、遍に一切衆相の上に超絶し、時間を超え、空間を絶して、同時に遍時間遍空間、一切の萬物を含藏すれども爲に本體を破らず。

十佛自境界。單一絶對にして之に均(一)すべきものなく法身は萬物の本體なれども萬物を解脱靈化の功を施さず。應身は應用無碍なるも統一の法を有せず。一切十方諸佛世尊及び諸の聖者及び一切無盡の法藏も悉く此徳より出でざるもの有ることなし。

虚徹靈明の態に無邊の聖徳を顯現し不可思議の妙用を施して遍空間遍時間、永恆存在して妙用を施して活動せしものは此光り也。此徳よく一切諸佛諸の聖衆を攝し法性無盡の功藏藏を包含す。

譬へば現界に太陽の光りの第一なるが如く至尊の光明は眞理靈界の中の王たり。一切の眞理の光は之より發せざるもの有ることなし。

十方の諸佛は此光によつて無上正覺を成す。又人格を以て圓滿に此光の靈化を顯すもの釋迦牟尼佛是なり。

此光の中には衆生あることなし。華嚴に佛正覺を成じたまふ時一切衆生悉く成佛すとは此義なり。

一切迷界の衆生は此光の中に在て自らしらす。有限差別の中に戲論を有無の夢を見る。絶對眞理の靈界をは未だ想像も及ばざる處なり。二乗は相待の偏眞を覺りて未だ奥妙に至らず。唯佛と佛とのみ統一の本體に入る。

楞伽に十方一切の法報應の三身及び諸の聖者は悉く無量壽極樂界中より出づとは此義なり。

十方一切諸佛を統一するときは即ち阿彌陀佛にして、彌陀無量の諸佛を出現したまふ。藕益師の彌陀經疏に一切諸佛本體より見れば彌陀にして分化よりは一切の諸佛同

一體の異方面なる義を釋せり。

彌陀經に、阿彌陀とは彼佛の光明無量にして十方の國を照して障礙する處なく彼佛の壽命及び人民無量無邊阿僧祇劫故名阿彌陀。

意の曰く、彼佛の本體と光明とは空間に滿遍せる實在なれば、其本體より一たび迷て衆生の數に墮落せしものも此光によつて自己の本性を發悟し解脫靈化するときは統一せられて無終の阿彌陀と成ることを得、人民も同化せらるゝが故に同じく阿彌陀なり。

觀經に所説の六十萬億とは其相好等は無碍光の不思議の妙用より現する處の勝應身なり。大經の法藏も同じく無碍光の用より法報の意志實現の爲に現じて大願を以て自己の本體より迷ひ出たる衆生を回復せしむる妙策を講せられたまひたるなり。

釋尊も同じく此土の衆生の爲に彌陀の無碍の妙用によりて應化の身を示されたるに外ならず。西藏佛教に阿彌陀佛禪定の中より光を放ち玉ひて釋迦牟尼を出現して衆生を度したまへりとは是なり。

十方諸佛も各同じく彌陀無碍の妙用を示したるに外ならず。彌陀經に六方各證誠す。實を以て論ずれば諸佛其土に出で、説法度生するが即ち證誠なり。いかにとなれば若し彌陀の眞理と無碍光との妙用が一切處に實在せるに非ずしては其應を示して其化用を現出すべき理あることなければなり。

我らは信ず。彌陀の本體は法界に周偏し無明の爲に迷て衆生の個體となりしものと。故に我らが本體は是彌陀の法身なりと。

我らは本彌陀の法身より迷て現じたる個體なるを以て佛性能豫備せるが故に又彌陀の光明の刺激によりて必ず發育するものと信ず。

我らは彌陀に乖離せるが故に迷となり我を執す。この乖きたる原罪は先天に有ることを。彌陀に歸し彌陀の恩寵に依るに非ざれば回復すること能はざるものと信ず。

無對は一切衆生は法身の本體よりいでたれば必ず之に歸し終局目的は彌陀に依らざ

るべからず。一切萬物彌陀よりいで彌陀に歸し其眞理は絶對なることを示すが此無對光なり。

無對は終局同化の徳。

至理は無對なり。之に歸せざるものは眞理に反するものなり。故に無明に迷没す。眞理斯の如く極まれる。此眞理に抵抗して歸することを覺らざるものは實に愚の甚しきのみ。

炎 王 光

斷盡の徳。

絶對の眞理一切衆生同一の法身なれば終局目的としては絶對に同化して絶對即ち眞理なるが故に、衆生根底を彌陀とし終局を彌陀として眞理なりと信すると同時に、一切衆生には斷盡せざるべからざる惡素質必然的に具備し之を斷盡せざるべからざることを。

一切衆生の惡素質を斷盡する處の功能を炎王光と名づく。

この惡素質を斷盡する功能あるを。炎王光とは、實に其功德の猛にして且つ激に非ずや。斯く感じ易き御名を以て聖徳を彰はしたまへども、之を意にせず空しく終身罪惡の皮殻を脱せざるのみならず其皮殻の中に安んじて自ら足れりと忍するが如きは傳染病毒を燒盡さずして衆人を毒殺するの理に異ならんや。

炎王光の本質は絶対理性即ち至眞の理體に大智慧光明にして一切衆生を同化すべき恩寵なり。絶対理性の大智慧の光明に對すれば、すべての無明および業障はもと迷妄にして實體あるものに非ざるを以て、譬へば日光東天に昇る時忽ち黒闇を滅消するが如し。

黒闇態は黒闇の時には實體の如くなれ共光明に對せずして其體を認ることなきが如し。無明および煩惱業障等は迷の中には實在の如くなれども眞理に對すれば實體なきが如し。

斷盡すべき惡素質。

若し惡素質脱却し去らば其體は至眞至美至善の精神態なり。之を覆ふ所の素質は無明煩惱と罪障となり。

三障。煩惱障と業障と罪障とし又は惑と業苦とす。煩惱に二種。見惑と思惑とす。

見惑とは知力が眞理を見するに覆ふ所の惑にして至眞即ち佛知見の障りなり。

思惑とは先天的にして天然性格に出る欲望にして天然の幸福主義なる肉慾と主我主義なる我慾となり肉慾は營養生殖等の及び色聲香味觸の五官感覺的欲にして我慾とは榮耀名譽威權等及び名利のために利己主義にして他の利害をも顧みず自己の強度の慾を以て主張し主義とし目的とせる欲望等なり。

此我慾に適する時は貪り之に反すれば瞋恚を起し眞理に迷て（）惱の如きはみなこれに屬す。

業障とは普通慾望に加へて若くは宿業よりの性格過去に作りし惡業によりて惡慣習より加へたる特殊の性格に出る惡と苦毒により、遺傳慣習なる精神病的變質にして、惡習慣が襲ひ來れば二代三代には遺傳的たる惡性格となりて先天の惡弊なるあり。之らを業障と云。先天のみにあらず後天に惡作は悉く之を改悔せざれば惡弊症となるに至る。其所作より惡弊となすは悉くこれに屬す。

罪障とは自ら意思と言語と身の行爲とに十惡等の罪を作りたるなり。殺生偷盜邪淫

妄語綺語惡口兩舌貪欲瞋恚邪見等の十惡業、内邪見にして外三業に惡業を造作す。べて罪障とす。

衆生惑によりて業を起し業によりて苦を受く。

罪過と苦毒との感情。

至心に歸命して彼の靈光に接せば三障の素質消滅せんこと譬へば大火聚の萬物を焚燒するが如し。

此炎王光に觸るゝもの三垢消滅し神靈同化せざるものなし。

藕益師の、此念佛三昧大火聚に觸るゝ者として焼かれざるものあることなしとは是なり。

心	衆	生	佛	本體、 無自性、 法性法身、	理具十界、性善惡、 地獄、餓鬼、畜生、 修羅、人間、天上、 佛界 菩薩 聲聞 緣覺	十界の自性。 照無量差別。 自性。 顯示清淨法一如。
				實相、 無相、 屬性、	十法界屬性、十如、 十法界各十種屬性、 相、性、體、力、作、 因、緣、果、報、等、	無邊光。 十界各屬性無 邊背光煩惱無 邊 此光照其實相 即無邊聖德。
法身自爾	十界互に十界の性能を具備。心其作用に隨ひ變化。			盡十方の法界を占め解脫靈		

法身無作 造作より得るものなし	即百界各十如あれば即千如。國土、身、心と三千となる。是三千は心の作用	無碍光。 報應二身を〇して衆生に應身衆生心想事成 靈化無碍
--------------------	------------------------------------	-------------------------------------

四〇

法身 非一非異	非體利用 法應報三身或十身 十方微塵無數諸佛 十方界 相續不斷 唯佛與佛境	無對光。 十方法報應是 彌陀佛より 十方諸佛統一 超勝獨明無對 光
------------	---	--

道理を推せば萬物の本源彌陀の法身なることをしる。この法身より賦せらるる心性を開展せしむる佛あるをしる。

形而上客體。無對は佛の境。
炎王光は六凡にのみ被る。已成の聖は要するなし。
能生を法身、能照を光

無對光と衆生との同一性に、自ら懸隔をなすはこの障の故なれば、本體は無明に非ず。罪惡に非ず。苦毒に非ずして是無明と罪惡と苦毒の淵本をあやまちたる。	六凡の性と屬性を用作になすべき惡質を斷滅する感苦業なり。 個人の心理には智情意の惡素質なり。	此炎王光普く十方法界に充滿して常恒に法界の衆生の感業苦を燒盡して止まらば。 衆生の心の解脱靈化して此の火聚に觸るゝもの惡質を燒かれざるものなし。
--	---	---

心理關係

四一

清淨光。	感覺。六根。六塵。染汚不淨。	六根清淨。
歡喜光。	苦毒惡罪。我（）貪欲	靈福、歡喜悅豫、平和、
智慧光。	惡智。不正見。無明。	佛知見。開示悟入
不斷光。	世俗野卑。主我。世界	聖靈化

四二

本體 本體法身萬物の根底甚深 難思の一切迷悟善惡是より生ず	重々無盡。果分。 十佛自境。	難思光 所化の境界活動 境界甚深難思 能化佛智甚深 彌陀の光明による精神
-------------------------------------	-------------------	--

法身はいふこと能はず故に無稱光。次に重々無盡にして永恒に盡ざるが故に無稱。 能化甚深	十方諸佛靈能さとりの上の佛事等はみな相好莊嚴も佛士の莊嚴も微妙の法音も悉く彌陀の光榮をあらはす。未だ開發せざるものより見れば法身の徳を現しざるなり。	無稱光 （）三業を以て彌陀の徳をほめた、ふ
上の精神世界（）なるに非ず。物質世界	物質世界も悉法身一元より出て萬物森然として宇宙にかゝる。十方無量の星界も及萬物の物質的光も超日月の光より顯現はれたるの理に外ならず	超日月光 十方微塵の現界宇宙の境界の光明も偶然にあらす。超自然の光明によりて現はれたるものなれば其源悉く超自然の彌陀の光を問接にうくるものと信すべし。

四三

昭和四年六月十五日印刷
二十日發行